

論のこと、南アメリカや熱帯アメリカにも分布し、さらに広く世界各国の寄生害草として君臨しているとされている。

したがって種内変異の幅も大きいのは当然で、近年、我国でアメリカネナンカズラを *C. campestris* Yuncker に当てる向きもあるが、しかし筆者はこれを *C. pentagona* Engelm. の種内のものとして扱っておくのが妥当と考えている。勿論、彼地における多くの関連文献を披見してみると、これを種内のものとするか、あるいは別種とするかについて、多少とも異論が認められるのも事実である。しかしながら、その大勢としては最近、アメリカ合衆国における種子植物フロラの権威であるニューヨーク植物園の Dr. Arthur Cronquist ら(1984)も扱っているように、これらを広く検討してみた結果、その間に移行型も多く明確に区別できず、同一種内のものとする見解に帰着するであろう。

従来、筆者が折に触れて述べているように(植研 55: 29, 1980)、外来植物は原産地での見解を十分に勘案の上、種を大きくみて同定すべきであり、しかも彼地で近似種が多く、分類困難とされているグループについては、特にその必要性があるとしてきた。本種についても筆者は、このような観点から取扱うのが妥当であると考えていることを、重ねて強調しておきたい。

因みに今後、さらに本種が我国のみならず東亜各地に広布し、その実態がより明瞭となり、必然的に区別が必要となったならば、その時点で細分して考えても、決して遅くないと思っている。すなわち花の大きな系統(2.0-3.0 mm 許)のもの〈オオバナアメリカネナンカズラ〉 var. *calycina* Engelm., Amer. Journ. Sci. Arts 45: 76, 1843—*C. arvensis* Beyr. ex Engelm. var. *calycina* Engelm. in A. Gray, Manual Bot. ed. 2, 337, 1856—*C. campestris* Yuncker, Mem. Torrey Bot. Club. 18: 138, 1932—*Grammica campestris* Hadac et Chrtek, Folia Geobot. & Phytotax. 5: 445, 1970 と、花のやや小形の系統(1.5-2.0 mm 許)のもの〈コバナアメリカネナンカズラ〉 var. *pentagona* とに区別したらよいであろう。

終りに外来品の検討に際し、種々御援助下さっているニューヨーク植物園アジア部長兼ニューヨーク市立大学教授小山鐵夫博士を始めとする関係者各位に対し、衷心より厚く御礼申し上げたい。  
(東京歯科大学)

□Polunin, O. & A. Stainton: **Flowers of the Himalaya** 580 pp. 1984. Oxford Univ. Press, London. ¥13,500. ヒマラヤの高等植物については、我国では既に原寛、中尾佐助両博士によるカラー写真図説が出版されており、外国でも数冊が出ている。しかし、カラー写真(696 葉)つきの植物の数は本書が最も多い。印刷も上出来で、大きさも手頃である。  
(小林義雄)